41120164
ODA

HIROMI
UDA

楕　円

一九七三年三月十五日　初版印刷
一九七三年三月三十日　初版発行

著　者　三浦朱門
発行者　陶山　巌
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　二六五―六一一一
印刷所　大文堂印刷株式会社
検印廃止
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

©1974 S. MIURA
0093―771050―3041

目次

第一章　再会　五
第二章　岐路　八九
第三章　転職　一六六

装丁　織田広喜

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

楕円

——「犠牲」第二部——

第一章　再会

一

片野明はその女子高の前で車をとめると、ポケットにメモ帖と名刺があるのを確認してから、運転手に、

「ほんの、二三十分ですむから、待っててくれ」

と言いおいて、放課後のガランとした校庭を歩いていった。校舎の壁面に時計がある。その下の入口が一番大きそうで、足が自然にそちらに向いた。入った所に受付がある。

「週刊タイムスの者ですが、和久井先生にお目にかかりたいのですが」

「和久井先生、いたっけ？」

受付の女の子は後ろを向いて、帳簿に何か書きこんでいる既婚女性風の事務員に話しかけた。

「いらっしゃらなければ、赤尾先生、岡谷先生でもいいんですが」

明はタバコをくわえると、カチと火をつけた。ちょっと芝居がかりだが、この際、悪党ぶってみせることは、相手にとってよりも、彼自身にとって必要なことだった。その三人の先生は、浅草で暴力団がやっているエロショウとブルーフィルムを見ていて、警察の手入れにあい、参考人として、事情をきかれた人々だった。いわゆる犯人ではない。しかし、女子高校の教師がそういう所にいたという事自体、犯人になったことに劣らず、具合の悪いことであろう。

編集部での明たちの班は、次の週の雑誌のために、「犯人をかばう犠牲者たち」といったテーマで、結婚詐欺にあった娘、裏口入学させてやると言われて、大金をとられた者、そういった詐欺事件の犠牲者たちのことを、一件あたり二頁、全部で八頁の読物にしようとしていた。だます方は確かに悪い。しかしだまされる方も、共犯とは言えないにしても、常識的にはしてはいけないこと、あるいはしない方がよいことをやったという負い目がある。狙いはその人間の弱さを、と言えばまともすぎるが、だまされる方もだまされる方だ、といった立場で記事にする予定だった。

明だけで週刊誌の頁にして十二頁も持っているから、今度のことにしても本来は何をどういう風に扱うかと、書き手の犬丸と打ち合わせるのが精一杯で、とても取材までするゆとりがない。つまり取材して原稿にするまでは、社員ではなく、一種の請負いのようなことになっている犬丸と彼の手下にまかせるのが普通なのだ。たまたま、その一人が盲腸でその日に入院してしまったので、明が狩り出されたのだった。同じ話をきくなら、あの団地夫人の方がよかったな、と明は

思った。
その女は、近くの写真屋に美人だ、きれいだとおだてられて、ヌードを写させてしまい、顔はぼかしてあったが、それをでかでかとショウ・ウインドウに出されたのだ。ほかの人は気付かなかったが、さすがに夫がおかしいと疑いだして、家庭争議になり、逆上した夫人が写真屋を訴えたのだ。写真屋のおだてにのるような女だから、同情するように話を持っていけば、何でもしゃべるだろう。帰りに写真屋によって、彼の言い分も雑誌にのせると言えば、問題の写真も頒けてもらえるかもしれない。まさか雑誌には使えないが、犬丸にやったらよろこぶだろう。
しかし明だって、虚栄心から裸を写真屋にとらせた女や、エロショウを見ていてつかまった女子高の教師に会って取材するには、ある種の勇気が必要だった。比喩的な言い方をすれば相手の恥部に、無遠慮に指でさぐりを入れ、
「ははあ、こんなにされちゃったんですか。あいつも悪いヤツですなあ」
と言う時、勿論、本当の正義感もあるのだが、自分の賤しい好奇心をそうやって満たしているという何か白々しい思いがあるのもまた事実である。
入社して一年半くらいして週刊にまわされて、最初に取材した相手が強姦された女子大生だった。なかなか会えなかった。その段階では、向うが会わないなら、何としてでも会ってやるぞ、と思ったのだが、親友の家にかくれていることを突きとめて、そこに行くと、本人も、友人の家に迷惑がかかっては、と思ったのか、そこの家の応接室で会ってくれた。

しかし、明がメモ帖を取り出すと、娘は両手で顔をおおってしまった。やがて、その指の間から、涙が湧いてきて、手の甲にしたたった。

「ひどい目にあいましたねえ」

と明は言い、何も聞き出せずに帰ってきた。

しかし今の明だったら、女の涙などでは引き退らない。女がその気にならなければ強姦なんて、できる訳がないと思う。現に雪子と夫婦喧嘩した時、彼女に敗北感を味わわせるために犯そうとして、どうしてもできないことがあった。あの娘だって命をとるとか言っておどされて、抵抗を諦めたのだ。それと、結婚すると言われて肌を許すのと、どれだけの差があると言うのだ。

とにかく、明はエロショウを見た三人の先生に会って話を聞きに来た。受付の女の子だって、彼の名刺と三人の名前を聞けば、明が何のためにやってきたかわかるはずだった。今ごろ三人の教師は相談しているだろう、会おうか会うまいか。どっち道、記事になるのなら、会わずにいて悪く書かれるよりも、会って事情を説明して、学校や三人の名前が出ないようにしてもらった方がいいのではないか。

廊下に面した事務室のドアが開いた。誰かが入ってくる。三人の教師の誰かだろうか。いや、女だ。岩下京子だ。明はタバコをくわえたまま、ゴクリと唾を呑みこんだ。

京子は明が結婚するかもしれなかった女だった。しかし彼は彼女の家に下宿までしていたのに、ある日突然、そこをとび出して、今の妻の雪子と一緒になってしまった。彼は京子と正式に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

婚約した訳ではなく、彼女の肉体を汚した訳でもない。しかし強姦の犯人と結婚詐欺とが似たりよったりとすれば、彼の京子に対する態度も結婚詐欺とどれだけ違うだろうか。

明には突然だったが、京子は給仕が職員室に持ってきた名刺で、取材に来たのが明であることを知っていたのだろう。やや青ざめて、引きつった表情をしていた。

「どうぞ」

京子は彼を事務室の隣の応接室に案内した。

「御用件は……」

「例の三人の先生方がエロショウの参考人になったことについて……」

京子はちょっと伏目になった。

「どんな風にお扱いになりますの」

「それは、犯人ばかりでなく、犯人とかかわりを持った方も悪い、と書くつもりです」

明はここで、言いつくろっても、かえって話がしにくくなると思った。破れかぶれでもあった。結婚詐欺同然のことをした自分が犯人なら、その相手になった京子だって悪い、と言いたかった。京子は唇を噛んだ。

「しかし、この事件にかこつけて、学校を中傷するような記事になさるなら、学園長はじめ、断乎として戦います。三人の先生だって、辞職問題になりますから、必死になるでしょう」

明のことは、京子の家では全く秘密というか、なかったことになっているのだろうな、と彼は

思った。
「大丈夫です。読者に警告するのが目的ですから、学校名も個人名も出しません」
「そうだ、という保証はどこにありますか」
「僕を信用して下さい」
京子はその時はじめて、渋い笑いを見せた。
「あなたには信用できないだろうな。今は淑真学園の岩下京子……先生でしょう?」
「ええ、英語を教えています」
「淑真学園の岩下京子先生が週刊タイムスの記者片野明を信用すればいいんですよ」
「信用できませんわ」
「それじゃ、印刷に廻す前に、原稿を持ってきますよ、それならいいでしょう」
「それは確かですか」
「そこまで疑われちゃあ……」
「少々お待ち下さい」
京子は明を残して部屋を出ていった。やがて、具合の悪そうな顔をした三人の男が応接室にはいってきた。明は先に京子に言った条件をのべた。
「そういう訳で、御迷惑のかかることはないと思います。大体、皆さんがおやりになったことなど、一人の社会人としては、全く当り前のことですから……」

取材を終って帰ろうとすると、教師の一人がたずねた。
「岩下さんと昔のお知りあいだとか」
「ええ、京子さんの家庭教師みたいなことをしてまして……」
「へえ、家庭教師」
その教員は意外そうな顔で呟いた。
明は社に帰って、とにかく二頁分の原稿を書いた。後で犬丸がザッと目を通して、文体の統一などをする。明はその前に、とりあえず、教師の一人の家に電話して、原稿を読みあげた。原稿を見せると言ったが、実際にはそんな暇はない。今夜中に印刷に廻さねばならないからだ。電話を受けた教師は、ほかの二人の意見もきかなくては、などと言ったものの、学校名と個人名が出ていないからいいではないか、と言って、押しきってしまった。
その日は、午前一時ごろ帰宅した。徒歩なら恵比寿の駅から十分ほど歩いた所だが、昔の大きな邸を切り刻んで作った小住宅地だから、家の二三十メートル手前までしか、タクシーが入らない。五十五坪の敷地に建坪二十二坪の家を作った。差し引き三十坪の庭があるはずだが、門のまわりや、裏の垣根との間に結構、面積をとられて、全く猫の額のような庭しかとれなかった。おまけにその庭も、前の二階家の陰になるもので、一年中じめじめして、芝生をはっても、まばらにしか生えないのだった。
明は家に入る前に、深夜の庭に立った。疲れてはいたが、真直ぐ家に入ってはいけないような

気がしたのだ。原因は京子だった。それまで締切に追われて、京子のことを考える暇もなかったが、心の底にずっと京子の思い出が、いわば出番を待っていたのだ。そしてこのまま家に入ってしまえば、そこは妻の雪子の世界だから、京子に会ったことは、もう一度、改めて心の底に沈めねばならない。だから、彼女のことを思うとすれば、今だった。

漆喰を塗り、雨戸を灰色に塗った小さな彼の家は、戸を閉じて、氷塊のように、月光を浴びて眠っていた。その中には、雪子と、二人の間の息子の務が、口を開けて、眠りこけているだろう。そこには、彼がこの六年間作ってきた家庭というものがあった。そして明は今、それから逃げ出したいような気がするのだ。

息子に無関心なのではない。庭に立って目の前の雨戸を見ていると、その中の部屋で、透明なよだれを弱くした電燈に光らせて眠っている顔も、その子供くさい体臭もありありと思い描くことができる。休みの日など、彼を連れてタバコを買いに行き、帰りに自分はタバコ、務はガムを楽しみながら帰ってくる時、しみじみ、息子がいるのはいいものだと思う。

そして雪子はまだ二十五をすぎたばかりだ、俗に言う女盛りという年ごろだろう。いつだったか、彼の家で麻雀をした時、犬丸が、

「おいしそうなカアちゃんじゃないの。うちなんかもう、三十五になっちゃって。ああなると女じゃないね、赤ん坊製造機だね」

犬丸も今はフリーだが、元編集者で、そのころ、同じ年ごろの同業の女と結婚したのだ。

この土地も家も、雪子の母の琴子が作ってくれた。だから名義は彼でも雪子でもなく、琴子である。雪子には昔、駈け落ちして二三ヶ月で舞い戻ってきた過去があったし、明にも京子という女がいた。それがよそ目には突発的に一緒になってしまったのだから、両方の親族の間では、この事件は大変に不評であった。明の母は京子の母と古い友人だったから、具合の悪い思いもしたらしかったが、幸い、明の両親は仕事の関係で地方にいたので、刺激を弱めるだけの距離を岩下家との間に持つことができたようだ。しかし明はまだ雪子を妻として、親の前に連れていったことはない。

雪子の一族は商家で、彼らの間では、

「雪子は二度もサラリーマンと駈け落ちして、あの家はどうなってるんだろう。親の琴子は雪子を産んだ後、子供を連れてサラリーマンと再婚したものの、貧乏暮しがいやで、離婚して、今の店を持ったはずじゃないか。それを今さら……」

といったようなことが言われているに違いなかった。

要するに味方は琴子だけだった。彼女だって、二人の結婚を祝福している訳でも何でもなかったが、たった一人の肉親である雪子を失いたくないというだけの理由で、面倒を見てくれた。二人がアパートを転々としているうちに務が産まれた。すると琴子は自分が務を抱いたりあやしたりする権利を確保するかのように、土地を買い、家を建てて明たちに住めと言った。琴子は週に一二度やって来て、務と遊んでゆく。しかし明の両親は決してこの家に来ることはなかったし、

彼の父が社用で上京する時も、明だけをホテルに呼びつけるのだった。

そういったことは、この数年の間に、すこしずつ固ってきた状況で、当人たちとしては大して異常とも何とも思っていなかった。それが今日、京子に会ったために、自分たちの生活の歪みを意識させられたのだ。もし、京子との結婚なら、雪子や琴子をも含む、すべての人に祝福され、雪子だって、年に何度かは手土産の一つも持って、遊びにくるような関係になったに違いない。

いや、明は雪子との結婚生活のせいで、世間が狭くなったことを後悔している訳ではない。ただ、雪子を妻にしたことが、果して自然なことだっただろうか、ということを、京子と会った時に思ったのだ。彼と雪子は幼なじみだった。血のつながりはなかったが、琴子が彼女を連れて、明の叔父と結婚していた時期があったから、彼女を従妹だと、子供のころは考えていた。そんなこともあって、明は相手の男に会ったことはないが、雪子が恋愛をし、北海道に駈け落ちしたという過去と、彼女に思いをよせた中年の作家がいたことも知っている。雪子の方にしても、まるでそのお返しのように、明が玄人女と、商売気を離れた関係があったことや、京子と婚約したと同じような関係にあったことも知っている。

つまり、二人は何もかも知りつくした上で結婚したはずだった。それにもかかわらず、明は雪子のことを何も知りはしなかったことを思い知らされた。明が雪子を連れて、都内のあるホテルに駈け落ちのようなことをした時、雪子はベッドの上で激しく泣いた。これは二人にとって、最初の経験ではなく、その日の午後、雪子が秘書をしていた小説家の家で、あわただしく触れあっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.